Icek Ajzen and Martin Fishbein, *Understanding Attitudes and Predicting Social Behavior,*

Prentice Hall, Inc., Englewood Cliffs, N.J., 1980, 278pp.

本書は，1960年代に態度測定に関する所謂フィッシュバインモデルを提案したイリノイ大学心理学教授フィッシュバインと共同研究者であるマサチューセッツ大学心理学教授アイゼンの共著単行本第2作であり，1975年のBelief, Attitude, Intention, and Behavior：An Introduction to Theory and Researchに続くものである．前作で詳述されたフィッシュバインモデルの応用が本書の主題である．本書は2部から成っており，前半でフィッシュバインモデルの原理的説明が与えられ，後半でその応用による行動予測の問題がいくつかの事例について述べられている．そして，それらの事例のひとつとして家族計画に対する態度と行動の関係が探求されている．

態度と行動の間の乖離は社会心理学の基本的問題のひとつであるが，フィッシュバインは行動の予測可能性を高めるような態度測定の方法を提案した．フィッシュバインモデルによれば，行動の直接の決定因は意図である．一方，意図は2つの要因によって決定される．ひとつはその行動に対する個人的な正または負の評価であり，もうひとつはその行動に対する促進的または禁止的な社会的圧力＝社会規範である．また，意図の形成に当ってこの2つの要因がどのように相対的に重み付けられるかは個々人によって異なりうるとされる．さらに，行動に対する個人的評価はその行動がどのような結果をもたらすかについての確信により形成され，社会規範はその圧力が知覚されることにより意図に影響を及ぼしうる．フィッシュバインらは，これらの要因を質問紙法で測定することによって意図を推定し，行動を高い確度で予測することができると考えた．著者らは予定子供数の信頼性の問題を取り上げ，今までの研究は集団レベルの平均値で予定子供数と実際の出生児数の間に高い相関を示しているが，個人レベルでは両者の間の一貫性が乏しいと主張する．よく指摘されるように，集団レベルの一貫性は必ずしも個人レベルの一貫性を意味しない．したがって，著者らは，従来の研究において予定子供数があまり信頼できない指標である原因は出生目標の測定の方法に問題があるからだと考えるのである．

フィッシュバインモデルにしたがって追加出生に対する評価と追加出生に対する社会規範の認知を測定し，追加出生の意図を推定した場合には，個人レベルにおいても追加出生の意図と行動の間の一貫性が高まったと報告している．さらに，著者らは発展途上国などにおいて家族計画の普及率を高めるためにフィッシュバインモデルを利用する方法にも言及している．すなわち，家族計画普及率を高めるためには，家族計画採用意図を促すような家族計画に対する好意的評価の醸成および家族計画を促進するような社会規範の確立に努力する必要があると主張する．

子供の価値に関する研究など心理学を標榜する人口研究も少なくないが，管見によれば，そのほとんどが単になんらかの意識調査を含んでいるというだけで，心理学的「理論」と関連付けて人口関係の議論を展開したものは極めて稀であると言えよう．伝統的に社会心理学の中心課題である態度と行動の関係に関するフィッシュバインモデルを利用して人口について論ずる著者その他の研究者の一連の研究は，その意味で例外的に心理学「理論」と結び付いた人口研究である．ただし，フィッシュバインモデルに基づく質問紙によって測定された態度と実際の行動の間の一貫性が高まるという事実は測定方法に由来するartifactであるという見方も成り立ちうるので，今後より綿密に検討する必要があるであろう．（大谷憲司）